

名誉と決闘と人生と

——コンラッドの『決闘』について

秋葉敏夫

(一)

十六万語を越える大作『フストローモ』(一九〇四)を書き終えたあと、ジョウゼフ・コンラッド(一八五七—一九二四)はイタリアへ旅に出る。しかしこの旅は災難続きで、彼自身悪性のインフルエンザに倒れ、長い労苦をいやし新たな英気を養うには、かなり貧弱なものだった。彼の作品は相変わらず売れ行きがよくなく、彼は慢性的な身体の不調を訴え、借金に借金を重ねてゆく。そして四月後にイギリスへ戻ると、彼は海での体験や思い出を随筆ふうにとめ、同時に手っ取り早い「金銭かせぎ」の短編小説をいくつか書くことになる。前者は自伝的回想記『海の鏡——思い出と印象』(一九〇六)として結実した。また後者のなかには、『密偵』(一九〇七)のように、長編小説へと発展してゆくものもあった。結局、一九〇五年秋から一九〇七年春にかけて、六編の中、短編小説が完成し、それらは短編集『作品六つ』(一九〇八)としてまとめられる。この小論で扱う『決闘』(一九〇七)は、そのうちの最も長い作品である。

ポーランド人コンラッドは、ナポレオンとその時代精神に深い興味を持っていたらしい。彼は時々大英博物館で、それらの調査や資

料集めに没頭するのである。そしてその興味とうん蓄を、中編『決闘』と未完の長編『サスペンス』(一九二五)に注ぐこととなる。随筆や回想記は別として、十五の長編小説と三〇ほどの中、短編を書き残した彼にとっては、その占める割合はごくわずかだが、いたいコンラッドは、なぜナポレオンとその時代に深い関心を抱いていたのか。その理由の定かなことは分からない。ただし、十九世紀の政治的不安定なポーランドでは、一般にナポレオン崇拜の風潮が国民の間に根強かった。さらにコンラッドの母方の大伯父はナポレオンの軍隊に参加しており、大伯父の手柄話に幼少時の彼は特に魅惑されたらしい。ナポレオンとその時代にまつわる多くの逸話が、苦難を克服する忍耐、未来を切り拓く勇氣と挑戦、それに華麗さ、洗練などと結びつくのである。作家コンラッド自身、『決闘』のなかで彼のとらえようとしたものが、「ナポレオンの時代の精神、…その信念の点で純粹なほど英雄的なもの」⁽¹⁾だったと、「作者の覚え書」に書き留める。

ナポレオンの時代が背景の『決闘』は、およそ三万語ほどの中編である。作家コンラッドは、短編でもなく長編でもない、その中間の長さをかなり好んでおり、またそれを得意にしていた。ロレンス・グレイヴァーの書くように、「彼の傑作、佳作のうち、長さ一

万語以下のものは「一つもない」のである。実際、中編は短編、長編それぞれの特徴を兼ね備えている。例外を除けば、登場人物の数は限定されるし、ストーリーも脇道に逸れることが少ない。そして主題の提示も、読者に見逃されることのないよう、かなり詳しく行うことができる。作品『決闘』の場合はどうだろうか。そこには少なくとも、主題にからむ人間の偏執的な執念と、ものごとの繰り返しや変化が書き込まれる。さらにストーリーの後半で読者が気づかなければならない、「時間の経過」が加えられる。この作品も、題材の性質と主題の効果的提示のために、中編程度の長さは必須だったと言つてよい。

書評家たちの『決闘』に関する評判は、けつしてよいものではなかった。社交的には好意を示す者もいたが、それはおざなりで無力な言辞にすぎなかった。また、この作品を「文体の傑作、芸術的筆致の確かな繊細さの点で、ツルゲーネフに匹敵する物語」と述べるのは作家コンラッドの文壇登場上の恩師、エドワード・ガーネットで、これなどはまさに例外と言わざるを得ない。たとえば「デイリー・ニューズ」紙のロバート・リンドは、見事に物語られているとしながらも、「この『決闘』はコンラッド氏の気まぐれな、半ば諧謔的で装飾的方法の好例である」と、内容の乏しさを、主題の欠如を指摘する。「デイリー・テレグラフ」紙のW・L・コートニーも、物語作家としてのコンラッドの力量を認めながら、「もう一つ別の『決闘』という物語は、その不必要な長さのせいで退屈なものになっている」と、この作品の陳腐さ、薄っ平さを攻撃した。作家コンラッドの方は、これらや同様の書評に接し、恩師への手紙で、次のように不満を述べざるを得ない。

『決闘』をお認めくださいまして、私の魂は慰められています。

最初の意図はその題名を「ヨーロッパの巨匠たち」というものだったが、それは格好よすぎるとして排除したのです。とにかく私は良心的に、主題の許す限り、ナポレオン時代の感情をできるだけ多く書き込もうと努めました。でも、この意図はすべての書評家から見逃されたのです。一人残らず表面的なストーリーだけを見る始末でした。

そして現在も、『決闘』の評価が少しでも上がってきているわけではない。いわゆる手っ取り早い「金銭かせぎの代物」として、この作品は軽視されるか、ほとんど無視される有様である。それはいいまいなせなか。作家コンラッドの真摯な意図が作品中に充分に発揮されていないためか。もしそうなら、その理由は何か。この小論は、中編『決闘』を取り巻くそれらの問題点を念頭に置きながら、その主題と方法を検討しようとするものである。

(二)

十九世紀末から二十世紀初めにかけて、コンラッドは数多くの傑作を発表し、いわゆるモダニストたちの先駆者となった。その際立った業績を振り返ると、たとえば次のようにまとめることができる。彼はさまざまな小説技法、特に時間の逆転、語り手の登場、人物や場所の象徴性などの試用と開拓に努め、読者の心に作品の主題を効果的に植え付ける。また「人間悪」と言ってもよい、人間の心の「闇」と人間心理の精緻な分析を展開する。さらに、小国ポーランド出身で、政治の被害者の視点から見ずえる、時流に抜き出た鋭い政治認識を小説のなかで印象的にドラマ化する。実際、当時の文壇はちょうど作家の交代期であり、コンラッドはこれらの特徴を武器に、新しい作家、それも一流の作家の位置を確保してゆく。ただ

し、彼の問題意識とその効果的提示に苦慮する真摯な努力が少数の
文人には認められるものの、一般読者の受けはけつしてよくなかつた。
彼の扱う深刻な主題が災いするのである。作家稼業を始めて十年たつても、
彼は借金を借金を重ねる状況である。コンラッドは一般読者の人気を得ようと、
時には、彼らの好む派手なアクションや彼の得意でない男女の恋を、
作品のなかに持ち込むことを考える。その結果として、それらの題材が彼の中期以後の一つの特徴となる
が、作品の質を高めるのに寄与してはくわけではない。

中編『決闘』の執筆時期は、一九〇七年初めのおよそ四カ月間である。
コンラッドはすでに全作品の三分の二以上を世に送り出し、作家として
いわば円熟期に入っている。『決闘』で扱われる問題は、小説技法のたくみな
駆使で、人間心理の盲点を突く印象深いものにする事ができる。しかしこの
作品も、一般読者を重視しようとする作家の姿勢を免れるものではなかつた。
コンラッドは新作の『決闘』を売り込むため、周旋業者のJ・B・ピンカーに、「少し言いくい
にくいことですが、今度の物語はよい作品です。アクションはセンセーショナル
で、ハッピーエンドの物語です」と書くのである。はたしてこれは、彼の
執筆当初からの意図だったのか。また、もしそうなら、書評家たちからこの
作品を攻撃されて怒る、作家コンラッドの真意は何なのか。

作品の構想が書き記されたいわゆる「創作ノート」を、コンラッドは残して
いない。実際、彼がそれを持っていたかどうかは不明であり、それを持ってい
なかつた可能性の方が強い。その代わり、全部で三五〇〇を越える手紙が、
作品の執筆開始と完成の時期、それが短編なのか長編なのか、またごく
わずかな言葉による内容の要約などを教えてくれることが多い。ただし、
それらが作品理解の大きな助けになるのは極めてまれである。中編『決闘』
の場合も、コン

ラッド自身による言及や説明は、その範囲を少しも出していない。しかも、
この作品には典拠があり、ストーリーの展開はかなり忠実にその典拠によつて
いるのだが、彼はそのことに一言も触れていない。

一般に、確かな典拠があり、それを基にすると、作品の善し悪しはそれを
活用する作家の手腕にかかってくる。つまり、その典拠にどのような価値ある
意味を見出し、たくみな小説技法を駆使して、それをいかに効果的に提示
するかである。『決闘』の場合、作家コンラッドは、長年にわたつて何
度も争われた伝説的「決闘」という事実に飛び付き、その特異さに心を奪
われてしまったらしい。彼はその小説へのドラマ化に際し、使い慣れた小説
技法を少しも用いないのである。『決闘』は作者の全知の立場から、時間
の経過に従つて、ストーリーが普通に進められる。ここでは、ものごとを象
徴で動かすようなこともない。おそらく、語り手を登場させてストーリーの
背後の意味を少し説明させたり、回想形式にしてストーリーの全体像を見
つめてみたり、象徴をたくみに利用すると、ストーリーの進展に変化も生
まれるし、主題の提示もより効果的に行われたことだろう。淡々と進むス
トーリー展開にはその先どうなるかという興味もわくが、その本質はもの
ごととの繰り返しにすぎず、この作品が「不必要な長さのせいで退屈だ」と
いう批評も、あながち的を射ていないわけではない。そして別の人から、
よく書けた印象的な場面がいくつあると、コンラッドの確かな描写力が賞賛され
ても、それぐらゐのことは職業作家の当然のものと言わなければならない。
ここで、中編『決闘』のストーリーに入つてゆこう。この作品は、十六年
間で五回の決闘を重ねる二人のフランス人将校を扱っている。時代背景は
ナポレオンの時代とその後で、彼らはナポレオンの軍隊に属していた。そ
して前後の差はあるにせよ、二人とも最後には大佐、將軍へと昇進する、
優秀な軍人である。二人の名前はフェロー

とデュベール。前者は南部出身の短気で自慢がちのけんか早い人物、後者は北部出身の概して冷静で良識的な温和な人物である。彼らはまさに対照的な性格で、血の気の多いフェローが常に挑戦者となり、思索的なデュベールは徐々に人生との関連で決闘を見つめるようになる。フェローにとって、決闘とは傷つけられた名誉を解決するための方策以外のなものでもない。しかし、最初の二人の決闘が人々の間で評判になり、その原因があれこれ詮索されても、フェローもデュベールもそれについて説明しないし、説明することができない。それはいったいなぜか。結果的に長年にわたった二人の確執の、そもそもの発端はどんなことだったのか。

若い将校フェローが、ある民間人から告訴された。「あんな塩漬けキヤベツ食いの平民に、第七輕騎兵隊の制服でブーツをふかせられるか」という理由で、彼は決闘を起こし、相手を負傷させてしまったらしい。ところが、その相手は町の有力な名士で、上司の指揮官はフェローを注意深い監視のもとに置こうとする。そしてフェローを探し、その伝言を伝えるよう命令されたのが、將軍直屬の若い将校デュベールである。彼はやつとのことでフェローをある貴婦人の応接間で見つけ、將軍の伝言を伝える。それは他の人々から離れた窓際で行われるのだが、貴婦人訪問を中断されたフェローは無礼な仕打ちを受けたと考える。「貴婦人と話しているのに、將軍の命令を持って来て邪魔したことを教えるために、お前の耳を切つてやる^①！」と、彼は息巻くのである。デュベールは上司である將軍の命令に従つたままでなのに、フェローは彼を許すことができず、ただちに決闘を申し込む。そして、激怒したフェローからまともには逃げられないと観念するデュベールは、その挑戦を受けざるを得ない。第一回の決闘はフェローの負傷で終わるのだが、彼はデュベールに、「事件はけつして終わったわけではないと知ってもらいたが

る^①」のである。中編「決闘」のストーリーは脇道に逸れることなく、まさにその通りに進んでゆく。

名誉とは、人間の並はずれた才能や努力の成果などに関する、輝かしい評判をいう。それはまた、世間から信用され敬意を表されるようなものごとを意味する時もある。後者の場合は体面とか面目と言ひ換えてもよく、中編「決闘」で特に扱われるのはこちらの方である。いったいデュベールは、決闘に値するほど、フェローの名誉、体面を傷つけただろか。作家コンラッドはその判断を讀者にまかせ、彼自身は一言も意見を差し挟むことはない。しかし彼が、ゆきすぎた名誉心、ゆきすぎた名誉へのこだわりを批判しているのは明らかである。名誉をもとにして、「善悪の判断基準となる倫理の、極端な愚かさの吟味」がまさに注目的であり、この作品のプロットの中核になっている。作家コンラッドはしばしば、けんか早いフェローのことを、「この愚かな野獸」と形容する。そしてその若い将校は、「野獸」のように「ほえ、わめく」のが普通で、一度は忘れかけたことがあるものの、いわば「野獸」の鋭い嗅覚でデュベールを追いかけ、彼を見つけ出してしまふ。

一回目の決闘のあと、この二人の若者は審問が行われる間もなく出陳した。しかし休戦が締結されると、フェローはただちに二回目の決闘をデュベールに申し込む。彼らの間にはもはや、昂進した感情以外、何も明確な理由はない。前者は「奴に一つ借りがある」と言い、後者は「氣違ひ野郎に教訓を教えてやらなければ」と、ぶつきらばうに宣言するだけである。今度の決闘では、デュベールが脇腹に負傷し、フェローの勝利に終わる。ただし彼はこれに満足せず、審判たちの勧める和解を拒絶するのである。

ストーリーはこの辺で、全体のおよそ四分の一度まで進み、展開部の前半までが終わっている。二人の若者はその決闘の原因につ

いて何も説明せず、そのためにさまざまな憶測を招いて、ひどい評判となる。デュベールは直属の上司、連隊長に呼び出されて真相究明の説明を受けるし、時間が経過して、順序の差はあるにせよ、二人とも大尉の位に昇進する。決闘は同じ階級の者同志でなければできないので、これで彼らの次の決闘の条件は揃ったわけである。作家コンラッドは、ストーリーの先の展開はどうなるのかという、読者の好奇心を喚き立てながら筆を進めるのだが、このあたりからは本質的に「ものごとの繰り返し」が多くなり、読者に単調で退屈な印象を与えなくもない。「コンラッドの短編小説」の著者、ロレンス・グレイヴァーは、そのなかで、中編『決闘』における作家の執筆態度と作品の特徴を次のように的確に要約する。

その二人の将校の異常な心理を分析する代わりに、コンラッドは彼らの苦境のばかげた運命や、それとその時代の華やかな情熱との関係を指摘し続ける。フェローの敵意とデュベールが妙におとなしく従う態度はあっさり触れるだけで、彼は軍隊のゴシップに関するありふれた一般論や、北部と南部の民族の相違に話をとどめてゆく。プロットが反復的になればなるほど、それだけ一層コンラッドは、その壮大で魅惑的な規模を主張しがちになる。そして登場人物は、まもなく、軽喜歌劇に出るばかげた人物へと縮小してしまう。

実際、二人の将校は、まさに狂気の沙汰としか言えないような決闘を、三回目、四回目とあっさりやってのける。それも従軍中の合間を見つけて行うのであり、二人の確執を周囲の者が止めることはできない。特にフェローのデュベールに対する敵意は激しく、彼は常に挑戦者であり、たとえばデュベールが先に昇進すると、彼は

そこに、決闘を逃れるための、「二つの陰謀、策略、臆病者の工作」を見る仕末である。三回目の決闘は、両者血みどろの闘いとなって、結局、引き分けに終わる。そして四回目の決闘では、デュベールは死を予感し、遺言書の冒頭を丁寧書き始めるほどである。ただし、馬上から行われたこの決闘は、最初の切り合いでフェローが額を負傷し、デュベールのあつけない勝利となった。

このあとは戦況が激化し、二人はそれぞれ別の戦地へ派遣されて、互いに出会うことがない。そして年月が経過し、彼らはともに大佐へ昇進し、老いの徴候さえ見せるほどになっている。デュベールは額がはげあがり、その優しかった目付きは戦火をくぐり抜けたためか、少し厳しいものに変わっている。一方、フェローのこめかみの近くには、白い髪の毛が多く混じっており、目尻にはしわも目立つ。また、彼の額には決闘での傷跡がはつきり残っていて、誰でもそれをまともには見えないよう注意されるほどである。作家コンラッドは、「時間の着実な経過」をそれとなく書き込み、二人にとっては決闘でしか解決できない、いわば非生産的的確執を人生との関連で見つめていることを暗示する。特に、煮え切らない性格上の欠点はあるにせよ、不本意ながら巻き込まれた感じのデュベールの人生に、焦点が向けられているの言うまでもない。

ところで、この作品においては、二人の間で五回の決闘が闘われる。それも使う武器は短剣、サーベル、ピストルと変化し、方法も徒歩の場合、馬上の場合とさまざまである。作家コンラッドは、廃れた決闘の一種の厳肅さ、格好よさを材料に、読者の興味を引き付けようと試みる。そしてそれと同時に、その背後に、決闘に明け暮れるフェローとデュベールの人生に、彼はまた、愚かさ、幼稚さ、それに狂気とさえ言えるものを見るのである。ナポレオンはコンラッドの傾倒した偉大な人物だが、その「時代精神」の実体は、一つ

には、まさにそのようなものとしてしか彼には映らない。はたして中編「決闘」における作家コンラッドの意図は、充分効果的に読者に伝わるだろうか。二人の主人公が少し劇画化され、全体的な素材の料理が平凡で陳腐なだけでは、それにかなり大きな疑問符を挟めるのではないか。

コンラッドはこの作品では、ほとんど「語り」の工夫をしない。彼は典拠となったストーリーの展開を重視し、それに彼の傾倒するナポレオンを色濃く反映させてゆくにすぎない。時間が経過し、二人の主人公がようやく再会するのは、ナポレオンがモスクワ遠征に敗北して、厳しい冬の最中をモスクワから撤退する時である。雪あらしに遭遇し、さらに疲労困ぱいした敗残兵たちが、コザック兵の発砲に危きながら、重い足取りで退却してゆく。およそ千五百語ほど続く、そういう場面の描写はなるほど見事に書いているのだが、結果的にはただそれだけで、たとえば戦争の悲惨さとか人間の愚かさなどを訴える力はけつして強くない。「モスクワからの撤退は、すべての個人的感情を惨禍と悲惨の海に埋没させた。連隊を持たない大佐、デュベールとフェローは、いわゆる聖なる大隊の兵卒に混じって、マスケット銃をかついでいた」と説明される。人間は多かれ少なかれ時代の流れに翻弄されざるを得ないが、まさにその好例に違いない二人の主人公の姿がそこにある。

彼らは無事にパリへ戻り、しばらくしてデュベールが將軍になった。しかし昇進の喜びを味わう間もなく、彼は次の戦争で負傷する。そこでフェローが將軍になり、後任として戦場へ派遣された。デュベールは自分の不運を呪うが、「他でもないこの名誉の負傷によって、運命が彼の将来を作りつつあった」と注釈が入る。つまり、ナポレオンが失脚し、政治体制ががらりと変わるのである。デュベールは以前、「この男は皇帝を愛していない」と、フェローから何

度か言われてきた。それは単なる憎しみに基づくものだったが、ほとんどその言葉を根拠に、彼はナポレオンの側近たちから不興を買っていた。おかげで彼は、新体制派の仲間と考えられ、逮捕を免れて療養続行を許可されるのである。一方、フェローは特別委員会の審問に立たされ、銃殺刑に処せられるはずになる。その窮地が救われるのは、本人のまったく知らないことだが、大部分、デュベールの必死の仲介によってである。

作家コンラッドのすぐれた描写力が、この場面でも自然に發揮される。彼の見事な筆致は過不足なく進み、前のモスクワからの撤退時同様、その緊迫した臨場感を確実に伝えてくれる。長さはここでも千五百語ほどと短いのだが、細部まで行き届いた的確な描写は読者の好奇心を十分に満たし、作品の中だるみを救うのに効果的である。実際、デュベールがフェローの銃殺刑抹消を望む背後には、もしフェローが銃殺刑を受ければ、彼の方が自分よりも重要視されたことになるという不満が見え隠れする。デュベールはその気持ちをつまみ自分の名譽心を悟られないよう懇願するのであり、彼が生死の危険を犯して取る熱意や脅しや厚かましさは、読者の心をとらえて離さない。そしてそれらの態度に応じる公爵で警察大臣の弁解は偽りがなく、その無関心さに加え、迷惑、困惑ぶりは「さもありません」と思わせる。デュベールの利己的な強引さと、結局はそれを受け入れる警察大臣の対応は、政治世界の裏面の一端、そのいい加減さ、出たら目さを暴露するようで、興味深い場面となっている。また、警察大臣によって発せられる次の言葉は、いみじくも、変革期の政治世界における人間存在の危うさと卑小さを突いていて、聞き手のデュベールをしばらく沈黙させてしまう。

……「処罰委員会の発足を私は本当に急いだのです。そして私が

その委員長に就きました。それがなぜだかお分かりですか。ただ心配だったんです、すぐにそれを手中に収めなければ、私自身の名前が処罰者名簿の一番最初に来るかもしれないとね。そういうのが私たちの生きていく時代なのです。……ねえ、將軍閣下、委員会のまさに最初の開会時に、名前が、チュイルリー宮殿の屋根から落ちる雨のように、私どもに浴びせられたんですよ。名前が！ 数千ものなかから選んだのです。このフェローという名前が——そんな人の生死はフランスにとつてはどうでもよいことです——誰か他の人の名前を締め出せないのか、あなたにどうして分かりますか」²⁰

しかし結局は、デュベールの懇願は極秘のうちに受け入れられる。フェローは銃殺刑を免れ、警察の監視のもとで、中央フランスの小さな町に住むことを許される。一方デュベールは、彼の助けた相手からさらに決闘を申し込まれることになるとは、この時点では夢にも思わない。

五回目の決闘が闘われるまでに、時間がしばらく経過している。デュベールは妹の見つけた女性と結婚することになっており、彼を取り巻く状況が以前の四回目とは少し異なる。実際、ロレンス・グレイヴァーの述べるように、短編集『作品六つ』では、「作家コンラッドが一般の通俗小説で不可欠だと考えたらしい二つの要素、愛とユーモアが新しく強調されている」²¹が、「ユーモア」は中編『決闘』には希薄なもの、クライマックス部に近いところでの「愛」の導入である。それによって、作品は一層華やかでロマンチックな様相を帯び、ストーリーの表面の変化に頼りがちな、コンラッドの安易な姿勢が窺われる。結婚前の幸せなデュベールは、惨めな気持ちに沈むことはあっても、生きる情熱で一杯になっている。ここで

は、「女性への愛」と「生きること」がほとんど同一視されているのだが、その読者への説得力は、婚約者に対するデュベールの気持ちやや観念的で形式的なので、けつして強いわけではない。それよりむしろ、デュベールの別の現在、「戦傷と老いの気配から、「太いステッキを使って歩く、少しびっここの一般市民」²²という状況の方が、ストーリーの全体をとらえていて、ずっと印象的なのではない。

中編『決闘』の隠れた主題は、まさに「時間の着実な経過」である。それは空気や水と同じように人々の普段はほとんど意識しない対象なので、まれにしかストーリーの前面に出てこない。フェローとデュベールの確執は知らぬ間に五回の決闘に及んでいて、十六年の歳月が確実に経過した。二人ともすでに四十歳の峠を越え、当時の平均寿命を考えると、もはや初老の人生に入っている。そしてそれは、ふと人生を振り返り、自分の送ってきた人生の実体を点検、評価すべき時期だろう。いったい彼らは、自分の人生、そしてそれへの態度を、自信をもって他人に吹聴できるだろうか。軍人として頂点を極めながら、よい同僚となったかもしれない二人は、ともに個人の確執で心の休まる時は少なく、精神的にはけつして幸せでない、貧弱な人生を送ってしまった。それも、途中の和解の提案を拒否してまでである。しかもその間、二人のほとんど気づかないうちに、「海より残酷、無情、厳格な時間の流れ」²³は進む。作家コンラッドは、いわば年代記ふうにより五回の決闘を丁寧に追い、その間の大事件と社会の変化、時代の変化を加え、一部の批評家から「退屈すぎる」と批判されるほど、だからだとストーリーを展開させて、たくみに「時間の着実な経過」を書き込むのである。作品の直接の狙いは別として、結果的には、その技巧を弄しない平凡な筆致で、予想外の効果が生まれているのではないか。

ストーリーは全体の約五分の四まで進んでいて、最後の決闘場面

はこの作品のクライマックス部になる。今度の決闘は早朝の松林を舞台に、二発の弾丸が込められたピストルを武器として行われ、作家コンラッドはその雰囲気を充分に盛り上げる。およそ千六百語ほど続くこの決闘場面の描写も、デュベールの心理と作戦を混じえ、最後の決戦にふさわしい厳肅な緊迫感を醸し出している。そして結果は、いわば二人の性格の反映で、短気でただの戦闘家にすぎないフェローが先に二発を空費し、冷静かつ思慮深いデュベールの戦略的勝利に終わる。「猛烈な気まぐれで押し付けられた、ばからしい残酷さに憤激し、恥をかいてきた」彼は、それでもフェローを殺すようなことはしない。積年の問題にけりがついて、「私はあなたを好きなようにする」と宣言しながら、デュベールは長期にわたる抗争とその原因を口外しないと誓うのである。彼にとつてもそれは恥ずべき行為であり、早く忘れてしまいたい人生の重荷だったからである。それにまた、前に引用したように、作家コンラッドは新作「決闘」を「ハッピーエンド」の物語として、周旋業者に売り込んでゐる。おそらく、デュベールの結婚はもとより、この最後の決闘で血を流さない解決にも、ストーリーの結末をあまり暗くはしたくないという、作家の商売上の配慮が働いているのではないか。

決闘でものごとのけりをつけようというのは、確かに当時でも、廃れつつある慣習だった。それをあえて行えば、理由は何であれ、当事者はスキヤンダルの発生源として、多かれ少なかれ、笑いものになるのである。フェローはそういう決闘の効能を深く信じており、時代変化の激しいなかで、まさに古い世代に属している。そして彼は、デュベールとの最後の決闘に敗れると、まるでその決闘とともに姿を消すかのごとく、もはや表舞台に出ることはない。ところで、デュベールの方は予定通り結婚し、幸せな生活を送ってゆくのであ

る。のちに息子が生まれた頃、彼はいわば「勝者の論理」として、決闘では最初から殺す気はなかったとフェローに手紙を書くが、フェローには和解の気持ちは少しもない。だが、年金を失って生活の苦しい彼に、デュベールは極秘のうちに生活費を送っているのである。「奴の頭を撃ち抜く権利は私にあった、でも撃ち抜かなかったのだから、奴を餓死させることはできない。……奴の最期まで、秘かに、面倒を見てやらなければ」と考えて。それはまさにフェローの名誉、自尊心、面子を傷つける行為だが、彼のまったく知らないところであり、短編小説の最後のひねり、たくみな「アイロニー」として、見事に効いている一矢であろう。

ものごとの「勝者」になると、それまでの憎悪や辛苦が軽減されたり、美化されたりすることがある。つまり、「勝者の論理」はいわゆる結果論を基にしており、そこには充分な余裕が生まれてくる。「勝者」は過ぎ去ったものごとを自由にとらえられるし、自分に都合よく、プラス思考で考えることができる。宿敵フェローに生活費を送るデュベールの場合も、それは例外ではない。あれほど悩まされた決闘も、今の彼は、臆病な自分に自信や勇気を發揮させる、一つの試練だったと思うのである。「見つけ出すのに何年もかかったかもしれないものを——それというのも、私はばかな臆病者だから——フェローの奴がある朝はつきりさせてくれたんだ。私には、自信というものがまっぴりなかつた。完全な臆病者だったからだ」と、彼は振り返ることができる。「勝者」のデュベールにとつては、生命を危うくされたかもしれない宿敵に対し、大きな感謝の気持ちを抱くほどになっている。そしてこれはまた、彼の人間性の反映に違いないのだが、作家コンラッドの意図する「ハッピーエンド」の結果でもあるはずだろう。ただし、デュベールが決闘を一つの試練とみなす考え方は、けつして説得力の強いものではない。ストーリー

の前半や中頃で、自分の臆病さに苦悩する彼の姿がほとんど描かれないので、彼のその気持ちはいささか唐突であり、読者の心の奥底にはあまり伝わってこない。

いままで論じてきたように、中編「決闘」はいかにも欠点の多い作品である。そのストーリーの展開は単調な繰り返しに終始し、主人公の性格創造も薄っ平で、魅力に乏しい。また、彼らの行動の動機付けは変化がなく、それはいつも単なる短気、狂気、妄執と従順、諦めなどに要約されてしまう。たとえばジョスリン・ベインズが書くように、この作品は「人間のそれほど深い感情にはけっして触れていない」と言っても、少しも間違いではない。そのうえ、ストーリーの結論部には、作品の売れ口を考慮した「ハッピーエンド」の観点からか、余分なものが入りすぎている。ストーリーは主人公二人の五回の決闘が中心なのだから、本当の「ハッピーエンド」は彼らの真の和解でなければならぬ。ところが、その和解の達成は描かれず、決闘の「勝者」の一種自己満足的な省察や行動が加えられて、いわば情緒的「ハッピーエンド」の雰囲気、ストーリーが終わっているにすぎない。

ただし、この欠点の多い作品にも、見逃すことのできない認識が隠れているのは重要だろう。ストーリーの主な時代背景はナポレオンの時代で、それはわずか十数年しか続かない、政治的変革期である。作家コンラッドにとって、同じ相手に五回も決闘を繰り返す二人の軍人は、まさに「時代の申し子」である。その「時代精神」を狙う彼は、二人の生きざまをかなり、「劇画化」し、「アイロニー」を混じえて扱った。そして彼は、たとえ名譽のためとはいえ、他人には口外できない些細なものと拘泥し、精神が休まることとはほとんどない、二人の十六年間の不幸を少なくとも確実に描き切る。一口に十六年間と言っても、青年後期から成人期にわたる、最も充

実すべき人生の十六年間である。二人の主人公の思いは表面的にしか描かれないのだが、特に「敗者」のフェローに窺われる、いわばつまらないことに人生を浪費した人間の姿と結果は、まさに惨めで印象的である。およそ三万語の中編「決闘」は、作家コンラッドの望んだ「ナポレオン時代の時代精神」に加え、彼自身あまり意識しなかったらしい、後戻りすることのない「時間の着実な経過」が書き込まれたところに、その存在価値があると言って、それほど大きな間違いではない。

註

テキストは Joseph Conrad: *A Set of Six*, (Dent's Collected Edition) (1923; rpt. London: J. M. Dent and Sons, 1954) を使用した。後註における頁数はそれによる。

- (1) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p. ix.
- (2) Lawrence Graver: *Conrad's Short Fiction*, (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1969), p. 39.
- (3) Norman Sherry (ed.): *Conrad, The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1973), p. 223.
- (4) *Ibid.*, p. 212.
- (5) *Ibid.*, p. 216.
- (6) *Ibid.*, p. 220.
- (7) G. Jean-Aubry: *Joseph Conrad: Life & Letters* (London: Heinemann, 1927), Volume II, p. 41.
- (8) Norman Sherry (ed.): op. cit., p. 223.
- (9) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p. 174.

- (10) *Ibid.*, pp. 175-176.
- (11) *Ibid.*, p. 189.
- (12) John A. Palmer: *Joseph Conrad's Fiction* (Ithaca, New York: Cornell University Press, 1968), p. 234
- (13) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p. 192.
- (14) *Ibid.*, p. 192.
- (15) Lawrence Graver: op. cit., p. 146.
- (16) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p. 203.
- (17) *Ibid.*, p. 211.
- (18) *Ibid.*, p. 219.
- (19) *Ibid.*, p. 217.
- (20) *Ibid.*, pp. 226-227.
- (21) Lawrence Graver: op.cit., p. 214.
- (22) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p. 237.
- (23) Joseph Conrad: 'Youth: *Heart of Darkness* and *The End of the Tether* (Dent's Collected Edition) (1923; rpt. London: J. M. Dent and Sons, 1954), p. 30.
- (24) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p. 256.
- (25) *Ibid.*, p. 258.
- (26) G. Jean-Aubry: op. cit., Volume II, p. 41.
- (27) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p. 266.
- (28) *Ibid.*, p. 264.
- (29) Jocelyn Baines: *Joseph Conrad, A Critical Biography* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1960), p. 343.